

「実践事例集Vol.14」(2017年4月発行)で  
紹介している事例を中心に抜粋しています。

(公益財団法人 ソニー教育財団)

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育 保育実践事例サイト  
<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>

実践事例集

<http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/practice/>

# 平成 28 年度ソニー幼児教育支援プログラム応募論文

転がす遊びの繰り返しから科学する心を育てる

～年中組 1 年間の転がす遊びに着目して～



学校法人恵愛学園愛泉幼稚園（新潟県）

### 3. 事例考察の手続き

事例から保育者のどのような援助が適切か適時的だったのかを考察するに当たり、援助を明確に捉えることができるよう内田ら (2014) が論理的思考が起こっている活動で、どのような援助が行われているか、実態を把握するために保育者の言葉かけの分類に用いた援助の水準 (表1) を考察の手がかりとした。また援助の中で援助の水準のどれにも当てはまらなかったものは、話し合いながら決めていった。遊びの中で子ども達が経験している内容 (育ちの内容) については保育者同士で事例を考察しながら育ちの様子を決めて当てはめていった。

また年中組の遊びでは転がすだけでなく坂の高低を利用して素材を滑らす、流すという行為もたくさん見られた。そのため本研究では流す、滑らせるという行為も遊びとして事例検討に含めている。

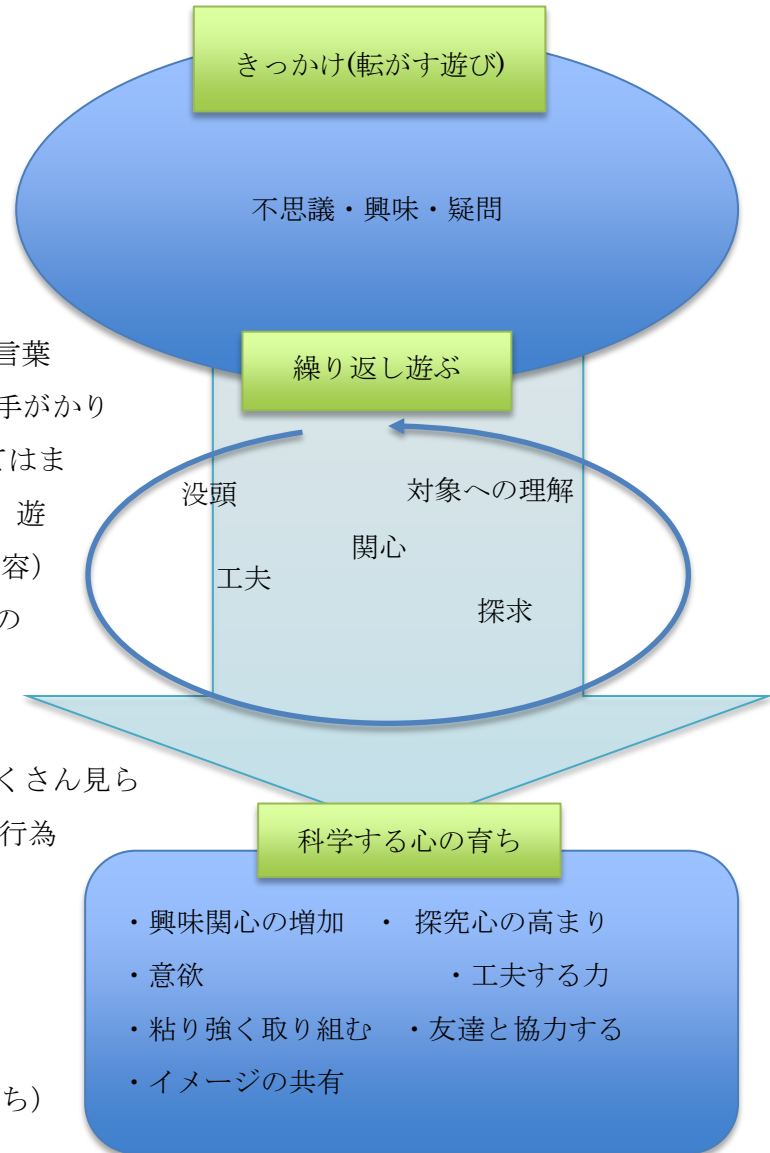
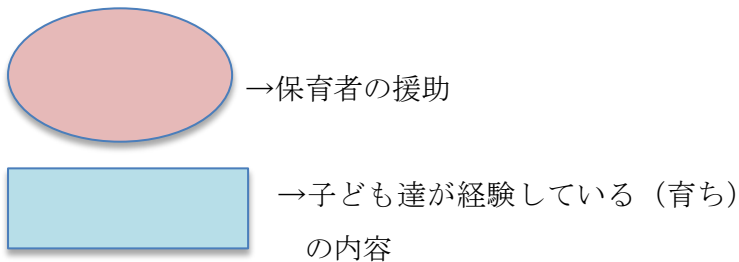


図1.繰り返す遊ぶことから育つ科学する心のイメージ

表1. 保育者の援助の水準

- 1.見守り;いつでも足場を架けられるように
- 2.足場かけ;見晴らしをよくしてやる。決定するのは子ども自身
- 3.省察促し;「どうしてかな」「どうなっているんだろうね」「どうしたらいいかしら」などで子どもにも再考させる。自分の決定を振り返らせる
- 4.誘導;「ここをこうしたどうかしら」と具体的な解決策・手立て・考える道筋を与える。
- 5.教導;回答や解説をトップダウンに与える。

## ＜事例①坂道ジェットコースター＞ (4,5月)

4月年少組の頃から慣れ親しんだ遊び、ミニカー、プラレールで既製のレールを組み合わせて遊ぶ姿があった。画用紙を繋ぎ合わせて道作りをするA男、道の真ん中に白線を忠実に描いていくB男、保育者は遊びをより面白く出来ないかと考え「高速道路にしよう！」と呟き画用紙で高速道路からの下り坂を作る。すると坂に魅力を感じたE男が滑り台といってミニカーを走らせる。しかし画用紙1枚でつくった道路は耐久性がなく、ぐにゃっと折れた。するとD男がジェンガを持ってきて画用紙の下に入れる。D男を見て他の子ども達もジェンガを調節してつめる。まだ友だちとの関わりが弱い時であったが、D男の考えを察し手伝ってあげる姿が印象的だった

高速道路からの坂道遊びはそれ以上の発展はなく、画用紙で出来た坂道だった為、耐久性もなく、しばらくすると壊れてしまった。しかし、転がす遊びの楽しさは子ども達の中に経験として残ったのかA男から「今度はビー玉転がしが作りたい。」という声が上がった。

保育者：「ビー玉転がし、楽しそうだね。どうやって作ったらいいかな？」

省察促し

A男：「う～ん…」と、しばらく考え込む。

A男：「分かんない。先生が作って！」

保育者：「Dくんが年少さんの時は、段ボールで作っていたね。ホールにあるソフト積み木でも作れるかもしれないよ。」

誘導

A男：「じゃあ、それで作って。」

保育者：「いいよ。」

遊びの経験が少ない事も念頭に置き、まずはA男の保育者に頼りたい気持ちを受け入れることにした。保育者がリードし、子ども達と一緒に作っていこうと考えた。アイデアとして“段ボールで作る”“積み木で作る”という二つのアイデアを出した。保育者とA男でビー玉転がしを積み木で作っているとB男、C男、F男、G男たちも参加する。保育者の動きを見て、子ども達も真似をして積み木を入れ始めた。

達成感

モデル性

A男「出来た～！」

A男が作った坂道は、積み木1つ分の高さの坂道であったが、その坂道を走らせて遊ぶ。

他の子ども達は積み木で直線の坂を作り、トミカを繰り返し滑らせて遊んだ。

## 【考察】

・ビー玉転がしをどうやって作ればよいかイメージができなかったA男に対して、保育者がモデルとなって身近な素材で作ることによって坂を作るイメージに繋がり、自分たちでも坂を作り始めた。

・勢いよく滑るミニカーに子ども達は夢中になり、何度も繰り返しミニカーを滑らせて喜んだり、どのミニカーが滑るか試そうとする姿が見られたり遊びが更に盛り上がった。

## ＜保育者の援助＞

最初保育者は省察促しを図ったが、A男の様子をみて保育者が用具を提案をする誘導的な援助を

行った。そしてモデルとなって遊ぶことで子ども達が自分たちで作れるようにしていった。

### <事例②お寿司屋さん→玉転がし> (9月)

～レーン作り 1～

2学期、保育室の環境を再構成し、段ボールをコーナーのつい立として使う事にした。登園してきたA男は保育者が用意した段ボールのつい立を見て、

自発性

A男「お寿司屋さんがしたい！」

と言う。お寿司屋さんのカウンターを連想したようだ。話を聞くと、回転寿司のカウンターで、レーンを作りたいと言う。

保育者：「流れている所（レーン）はどうやって作る？」

省察促し

A男：「この位の大きさの段ボールが必要。」

H子：「テープでくっつけなければいいんだよ」

何が必要か  
見通しをた  
てる

I子：「私もやる。」

A男、H子、I子は段ボール片をガムテープで接着していく。

H子：「お寿司がここを流れるの。」

A男：「じゃあ、ここはどっちに行ってもいいってことね。」

I子：「こっちも貼ってもいい？」

イメージの  
伝え合い

H子：「うん、いいよ。」

見守り

三人でイメージを広げ、アイデアを出し合いながら作っていく。空間の使い方を予想し、道筋を考えながら進めていく。レーンは坂道になっており、子ども達のイメージの中では坂道を転がって（滑って）お客さんの所まで届くという仕組みのようだった。三人で遊びを進める姿があった為、保育者は製作コーナーから三人の遊ぶ様子を見守った。しかし、途中で突然手が止まってしまった。イメージ通りに形にならず、困っていた様子だった為、「こうしたいってことかな？」と、保育者も手を添え、段ボールを支えながら子ども達のイメージを聞き出そうとした。しかし、A男「もういいの。」と言い、A男、H子、I子はその場を離れ、ホール遊びへと出掛けて行ってしまった。

省察促し

#### 考察

- ・仲良しのA男、H子、I子は3人でイメージを伝え合いながら遊ぶようになっている
- ・段ボール、ガムテープ等、以前に使ったことのある素材を選択して作っている。
- ・A男はレーンを作る為に見通しを持ってどのような素材が必要か考え、友達にイメージを伝えながら遊んでいる。
- ・子ども達はイメージ通りの形にならないことから関心を失いあきらめてしまった

<保育者の援助>

保育者は子ども達が話し合いながらお寿司屋さんのレーン作り（坂道作り）を進める姿があったため見守っていた。そして子ども達の中で行き詰まった様子がみられたため、子ども達の中でしたいことを明確にしようとしたが、子ども達はあきらめて他の遊びに移ってしまった

### ～レーン作り 2～

遊びから離れてしまった三人であったが、続きが出来るように、翌日も同じようにレーンを設定した。登園すると、A男、F男がお寿司屋さんの設定に気付いた。

（H子、I子は、女兒達とままごと遊びへ）

前日、子ども達が作ろうとしていたようにレーンを接着しようとするが、段ボールの耐久性が弱く、つなぎ目が歪んできてしまう。

保育者：「ここ（つなぎ目）が押さえられるといいんだけど…。」

A男：「ちょっと待ってて。」

A男とF男がホールからソフト積み木を持って来てレーンの下に入れた。

保育者：「A男くん、F男くん、よく考えたね！いいアイデアだね。だけど、あとこの位入れられるものないかな？」

誘導

キョロキョロと辺りを見回したA男、F男。

予測

A男：「はい、これをいれればいいよ。」

A男は傍に置いてあったガムテープを保育者に差し出した。ガムテープを入れると、高さがピッタリとはまり、隙間がなくなった。

共感

保育者：「すごい！A男くん、丁度いいもの見つけたね。」

A男：「これ位かな～？って思ったらぴったりだった！」

前日と違い、自分で予想した事が的中し、嬉しそうなA男。

A男：「よし、お寿司を流してみよう！」

自信

早速お寿司を転がして（滑らせて）みる。

A男：「皆、離れてー！いくよ～！」

お寿司がレーン（坂道）の上を流れて（転がって）行った。

達成感

A男：「やったー！」

A男の喜ぶ姿に、他の遊びをしていた子ども達も集まってきた。中には、H子とI子もおり、順番にお寿司を流して（転がして）楽しんだ。

#### 【考察】

・自分の考えた事（歪んでいる段ボールの下にソフト積み木を入れる、高さの足りない分はガムテープを入れて高さを揃える）が成功した事に、気持ちを立て直した。

・A男は歪んでいる段ボールの下にソフト積み木を入れる、高さの足りない分はガムテープを入れ

て高さを揃える等工夫して身近な物から見つけ出した。

<保育者の援助>

- ・保育者はまた遊びが続くことを願って前日と同じお寿司屋さん遊びの環境構成を行った。
- ・保育者が誘導的な言葉をかけていくことでA男は諦めずにお寿司屋さんのレーン作りを完成させた。

～レーン作り 3～

レーン作り 2 から 2 日後、

A男から道（レーン）を 2 段にしたいという声上がる。おそらく、家族で回転寿司を食べに行った経験から、イメージが広がったのだと思われる。

保育者：「どこに上の段を作るの？」

省察促し

A男：「魚べいはこうやって上と下になってたよ。」

イメージ  
の表出

G男：「そうだよね。新幹線がお寿司を運んでくるんだよ。」

保育者：「新幹線がお寿司を運ぶの？すごいね！面白そう！じゃあ、上の段はここに作ればいいのか？」

省察促し

A男：「うん、そうだよ。」

保育者：「じゃあ、ここからこうなるってこと？」

省察促し

A男：「うん！」

保育者：「じゃあ、これ位の長い板が必要ってこと？」

省察促し

A男：「うん、そう！」

保育者は、A男の作りたいイメージを一つ一つ言葉とジェスチャーで確認していった。すると、

A男：「僕、積み木取って来る！」

イメージの明確化

レーン作りに興味があったA男に変わり、お寿司屋さんごっこが始まると、B男、K男、L子、M子などが遊びの中心となっていった（A男、H子、I子もちろん遊びに参加し、積極的にお客さんと呼び、楽しむ姿があった）。進んで元気に「いらっしゃいませ！」「ありがとうございました！」と、お客さんに声を掛けた。



【考察】

・レーン作り2での成功体験が、A男の心を変えた。お寿司屋さんごっこをより面白く、より本物に近づけて遊びたいという気持ちが生まれた。

<保育者の援助>

- ・保育者は子ども達の思いを見取り、省察促しの言葉をかけながら子どもの作りたいレーンのイメージを明確化させている。
- ・遊びを支える為にA男のイメージを保育者が理解する事が必要と考え、言葉とジェスチャーで聞き出すことでA男にとってもぼんやりとしていたイメージがよりはっきりとしたものになっていった。

一方で、レーンの上からお寿司を流す事が楽しくなり、次第に滑らせることに夢中になり始める。初めはお客さんの注文を聞いて、必要なお寿司を流していたが、お客さんの注文を待つ事が出来なくなり、特にB男とK男は注文が入る前から目の前にお寿司をどんどん流して（転がして）喜ぶようになってきた。お客さんが、注文していないお寿司がたくさん流れて来る事に困っていても、全く気にしていなかった。遊び込むうちに、次第にお寿司を流す事に夢中になっていったB男、K男。二人の様子から、遊びの中で子ども達が楽しんでいるポイントがお寿司屋さんごっこから坂道を転がす遊びにシフトしてきたのだと感じた。遊びを邪魔しようとしていたのではない事は感じ取れた為、二人の行動は咎めず、何がしたいのか尋ねることにした。するとお寿司屋さんをやるよりも転がす遊びがしたいことが分かったため、転がす事を楽しめるようにビー玉転がしを作る事にした。そうしてお寿司屋さんと転がす遊び、それぞれの遊びたい思いを保障した。

<～玉転がし～>

お寿司屋さんごっこのレーン作りの経験から、段ボール+ソフト積み木で作る事になった。B男、K男に加え、C男、M子、N子、O男が集まってきた。保育者は、子ども達が遊べるように、遊びのコーナーとコーナーの間に空間を作り、子ども達と一緒に坂道を作り始めた。

B男 : 「もっと高くしようよ。」

C男 : 「僕、ホールから積み木持ってくるね。」

K男 : 「よし、もう一つ積み木をつなげよう。」

B男 : 「じゃあ、こっちの積み木は少なくして、そっちは多くして。」

B男が中心となって、ビー玉転がし作りが進んだ。保育者が用意したソフト積み木だけでは足りず、自分達で自発的にホールから必要な数を集めて来る姿が見られた。事例②の時よりも高く長く道を作り、更にその上に段ボールの道を置くなど、工夫の跡が見られた。

保育者 : 「すごいね！長いビー玉転がしが出来たね。」

B男 : 「うん！出来たから、ビー玉ちょうだい。」

ビー玉をB男に渡す事が出来たのだが、ビー玉では転がる速度が速すぎて見失ってしまう事、子ども達の作った坂道には枠がなかった為ビー玉がすぐに落下してしまい、坂道を長くしたり角度を変えたりする事を楽しめなくなってしまうのではないかと考え、子ども達がビー玉に変わる物を探し出せるように、

面白さの  
追求

見守り

認める

意欲の高まり



保育者：「ごめんね。先生、ビー玉持ってないんだ。何か良い方法はないかなあ。」

と、返答した。

C男：「いいこと考えた！」

C男はヤクルトの容器を転がし始めた。

保育者：「いいねえ。ヤクルトの容器、よく転がるね。」

B男：「紙を丸めたら玉が作れるよ。」

そう言って、折り紙を丸めて玉を作るB男。B男の真似をして折り紙を丸め始めるK男、M子、O男。ヤクルトの容器を2つ組み合わせて、まっすぐ転がるように工夫するC男。子ども達は、実際に試しながら転がし易いものを探そうとするようになっていった。子ども達はB男の折り紙を丸めた玉を気に入った。この日から毎日玉転がしの遊びが続いた。登園すると、ソフト積み木を運び、自分達で自発的に台を作る所から楽しむようになっていった

省察促し

問題の  
解決

認める

友達の考えを  
認める

工夫

場の選択・準備

試す・工夫する



## 考察

- ・以前のレーン作りの経験を活かしてビー玉転がし作りでは自分たちで積み木と段ボールを使って組み立てていった。
- ・保育者が転がる素材を考えさせるというほんの少しの壁を作ったことで、子ども達らしい素材を発見し、より転がしやすいものを探そうとするきっかけになった。

### <保育者>

- ・子ども達が遊びを自分たちで面白くしようと展開していたため見守る援助を行った。また子ども達が作った転がし遊びの面白さを見取り、より子ども達が工夫して転がし遊びに向かっているように言葉をかけた。

<事例④どんぐり転がし> (9・10月)

～園外保育でどんぐりを拾う～

9月下旬、園外保育で鳥屋野潟公園へどんぐり拾いに出掛けた。地面にたくさん落ちているどんぐりに子ども達は興味津々。「先生、見て見てあったよ!」「双子どんぐりみ～つけた!」「帽子被っているどんぐりもあるよ。」たくさんのどんぐり、松ぼっくり、小枝など、秋の自然物を拾い、子ども達は満足感から心を躍らせて園に戻ってきた。

保育者：「皆で力を合わせたら、こんなにたくさん集める事ができて、嬉しいねえ。このどんぐり、全部皆が遊びに使っていいんだよ。皆はどんぐりでどんな遊びがしたい?」

「どんぐりゴマ!」「どんぐりネックレス!」「どんぐりにお顔描きたい!」「どんぐり転がし!」「どんぐりマラカス!」どんぐりを使った色々な遊びが出てきた。

保育者：「素敵!全部面白そうだから、明日から、今出てきた遊び、全部しよう!」

子ども：「やった～!」

次の日から、子ども達のどんぐり遊びが始まった。保育者は、保育室に、子ども達が拾ってきたどんぐり、松ぼっくり、小枝を種類ごとにかごに入れ、使いやすく飾っておいた。

～どんぐり転がし1～

翌日、戸外遊びに出掛ける際、A男、B男、C男、D男、E男、F男、G男、J男、O男、から「どんぐり転がしがしたい!」という声上がり、園庭でどんぐり転がしを作る事になった。

保育者：「お外でどうやってどんぐり転がしを作るの?」 省察促し

F男：「ほら、外にお水流す長い(外遊び用の雨どい)あるでしょ。あれで作ればいいんだよ。」

保育者：「なるほど。といを言えばお外でも出来るね。F男くん、よく考えたね。」

F男：「えへへ。」(照れながら喜ぶF男)

いざ園庭に行くと、遊んだ事はあるもののとい遊びの経験の少なさからか、新しく遊ぼうとしている遊びに構えてしまったのか、何となく動き出せずにいる雰囲気漂った。そこで、

保育者：「どこにどんぐり転がしを作るの?」 省察促し

F男：「この辺に作りたい。」

保育者：「じゃあ、といを持ってこよう。」

保育者が率先してといを運ぶ姿を見せ、子ども達が動き出し易いように流れを作ることにした。保育者がといを運ぶ姿を見て、

E男：「僕も持ってくる～!」

と、子ども達も動き始めた。

保育者：「どうしたら坂道作れるかな～?」 省察促し

B男：「分かった!あの箱(ビールケース)を持ってくればいいんだ!」

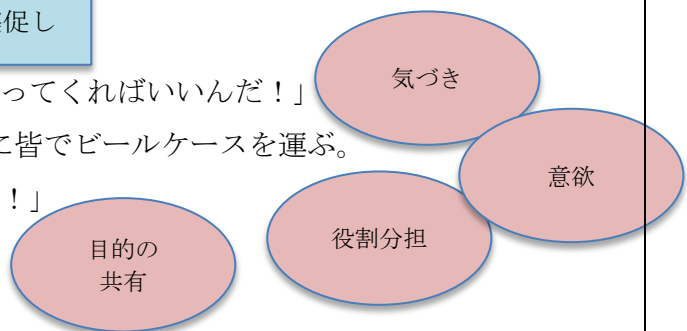
B男は、以前遊んだ経験を覚えていたようだ。次に皆でビールケースを運ぶ。

F男：「よし、箱を下に入れよう。誰か持ってて!」

A男：「これも入れよう。」

B男：「こっちも必要だよ。」

子ども達は、考えた事を伝えたり、友達の言葉を聞いて動いたり、ワイワイと賑やかに坂道作りが



進んでいった。子ども達の流れが出来てからは、保育者は一歩引き、子ども達同士のやり取りや動きを見守るようにした。持ってきた道具（雨どい、ビールケース）を全部使い、どんぐり転がしが完成した。

A男：「よし、どんぐりを転がそう！」

見守り

「僕も！」「僕も！」と、我先にと箱の中からどんぐりを取り出す子ども達。順番にどんぐりを転がすと…どんぐりは見事に転がっていった。

保育者：「うわぁ！本当に出来たね。どんぐりがたくさん転がっていくね。」

認める

子ども達は、何度も何度も繰り返しどんぐりを転がして遊ぶ姿が見られた。

没頭

### 【考察】

- ・友達と共通の目的を持てた事が今回のどんぐり転がしの遊びへと繋がった。
- ・子ども達のやろうとしているイメージを聞き出し、それに沿うように保育者が率先して準備を始める姿を見せるようにした。ビールケースを運ぶ辺りから、子ども達同士で声を掛け合う姿が増えてき、自分達の力で作り上げていった。
- ・戸外での違った用具でも坂を転がる原理を理解して以前使った積み木と段ボール組み立てを応用して、ビールケースと雨樋を使って坂を作っている。
- ・自分の考えをはっきりと言える子、控えめだが、友達の会話から自分のやりたいことを見つけられる子、様々な姿の子ども達であったが、皆で力を合わせて作っていく姿がみられた。

#### <保育者の援助>

- ・保育者は遊びの目的の明確化を図り、省察促しをしながら子ども達の遊びの場、用具、の選択を促していった。
- ・子ども達はといを使って遊ぶ経験が乏しかったため保育者が雨どいを運んで足場掛けを行った。
- ・子ども達が自分たちで坂道を作りだすようになってからは保育者は見守り、子ども達へ自分が感じた感動を発言している。

### ～どんぐり転がし2～

翌日「今日もどんぐり転がしがしたい！」という声が上がった為、園庭へ遊びに行く。保育者も一緒に遊びながら子ども達と一緒に直線の坂道を作る。途中で保育者は他の遊びをしている子ども達に呼ばれその場を離れた。しばらくして、保育者が戻ってくると直線だったコースに折り返しがついていた。

保育者：「…!?あれ？坂道が変わってる？ピタゴラスイッチみたいだね。」

コースの複雑化

B男：「そうだよ。こう行ってこう行くんだよ。」(指で道筋を辿って見せながら保育者に説明する)

保育者：「えー！面白そう！そんなことが出来るの？」

A男：「え～？出来るよ。じゃあ、見ていてね。」

どんぐりを転がして保育者にできることを証明してみせる。

保育者：「うわぁ！本当に転がった。」

B男：「最後にこの穴の中に入るんだ。」（雨どいの角度を調節しながら説明する）

E男：「先生、すごいでしょ？」

保育者：「うん、すごくびっくりした！誰がこんなすごいこと考えたの？」

認める

B男：「僕だよ。」

B男は嬉しそうな表情で、手は雨どいの調節で忙しそうにしながらも答えてくれた。

B男：「もうちょっとこっちにしないと、どんぐりが落ちちゃう。」

調節する

J男：「お～い！どんぐり転がすよ！」

話し合いながら進める

B男：「ちょっと待ってー！」

活き活きと言葉のやり取りをし、試しながら坂道作りを楽しむ子ども達の姿があった。



### 【考察】

・直線のコースを作り上げた満足感から、変化を求めるようになり、折り返しのコース作りへと変わっていった。

・遊びをより面白くなるように変化させてみようと試行錯誤しながら挑戦してみようとする気持ちや、予測し『こうしたらどうなるかな？』と探求心も育ってきていることが感じられた。

#### <保育者の援助>

保育者は見守る援助を基本としながら、複雑化していった坂道を作った子ども達を認める言葉をかけている。

～どんぐり転がし3～

A男 :「今日は一番長い坂を作りたい。」

挑戦する

探究心

A男の言葉から長い坂道作りが始まった。保育者は、道具を運ぶ係になり、組み立てる所は子ども達で行った。

F男 :「ちょっと、誰か、ここ持ってて！」

思考をめぐらせる

O男 :「分かった！」

問題解決のための話し合い

E男 :「僕、台（ビールケース）を持ってくる。」

J男 :「ダメだ、ここからずれてきちゃう。」

協力

B男 :「ここに箱（ビールケース）を入れればいいんだよ。」

今までよりも長く、大きなどんぐり転がしの装置が出来上がった。いざ、どんぐりを転がす段階になった所で、子ども達はスタート地点が坂道でなく平坦な為どんぐりが転がらないという事実に気付いた。

保育者:「どんぐり、転がらないね。どうする？」

省察促し

と、解決方法は伝えず投げ掛けた。しばらく考えた後、

課題解決のための工夫

A男 :「大丈夫だよ。こうすればいいんだよ。」

そう言って、A男はどんぐりを指で弾いた。どんぐりは、A男の指の力で飛び上がり、偶然にも雨どいの中に落下し、そのまま落ちた所から坂道を転がっていった。

A男 :「ほらね。」

偶然上手くいったのだが、指で弾くという新たな遊び方に、「僕もやりたい！」と、子ども達は夢中になり、どんぐりを弾いて転がす遊びに発展していった。

没頭

雨どい遊びは10月中頃まで続いた。その後も気持ちが向くと時折登場し、遊んだ。転がすものも、その時々で、砂、水、松葉、石など、様々な物を転がして楽しむ姿が見られた。



転がす素材の工夫

面白さの追求



【考察】

- ・折り返しの坂道の次は、「坂道を一番長くしたい！」と、新たな遊び方を考え、挑戦した。「こうしたらどうなるかな？」「こうしてみたい！」と、予想を立て、試しながら遊ぶ姿があった。
- ・A男は遊びの経験を重ね、好奇心が強くなり、諦めずにやってみようとする粘り強さが見られるようになってきた。様々な成功体験から自信が持てるようになり、挑戦する意欲が増したと考えられる。又、転がらないどんぐりを指で弾いたA男。上手く行かない事があっても工夫して遊びを面白くしようとする力が育ち始めていると考えられる。
- ・お互いに声を掛け合い、お互いの話に耳を傾け、「分かった！」と言って、協力して作っていかうとする姿が見られた。友達と同じ目的に向かい、自分に出来ることをする＝友達と力を合わせる力の育ちも感じられた。

〈保育者の援助〉

保育者は見守りながら子ども達が遊びの中で経験していること、遊びの深まりや思い、育ちを見取り、子ども達だけで難しそうな場面では省察促しをしながら援助している。

〈事例⑤牛乳パックで出来るかな？〉（11月）

～牛乳パックを繋げる～

11月下旬、製作コーナーで遊んでいたA男、B男、F男。嬉しそうに会話が弾んでいた。しばらくすると、保育室に置いてあった牛乳パックをハサミで切り開き、ガムテープで繋げ始めた。

保育者：「A男くん、B男くん、F男くん、楽しそうなことしているね。何を作っているの？」

新しい素材での探求

A男：「ビー玉転がし作ってるんだよね。」

B男・F男：「ね～！」

保育者：「うわぁ～！楽しそうね。牛乳パックで作るの？」

A男：「そうだよ。」

どんぐり転がしで雨どいを使った転がす遊びの経験から、雨どいと牛乳パックのイメージが重なったのだと思われる。子どもにとっては少々硬い牛乳パックを根気強く切っているが、次第にA男とF男は牛乳パックの数が足りないことに気付いた。

省察促し

保育者：「どうする？どこかに牛乳パックないかな？」

保育者が用意することも出来たが、必要な物を自分達で探す経験をして欲しいと思い、投げ掛ける援助に留めた。

問題解決のための意欲

協力

A男・B男・F男：「探してくる！」

保育者とA男・B男・F男のやり取りを見ていたH子、I子、Q子、M子、R子も「私も一緒に行ってきてあげ

る！」と仲間に加わり、素材置き場や他クラス、色々な所から牛乳パックを集めてきた。切り開くのはA男・B男・F男、繋ぎ合わせるのを女児たちと保育者、皆で力を合わせて作り始めた。

A男・B男・F男：「やったー！できたー！」

達成感

共感

保育者：「やったね！長くなったね。」

A男・B男・F男は嬉しそうに牛乳パックを眺める。

保育者：「女の子たちもありがとう。」

女児達も牛乳パックが長く繋がったことを喜び合う。

保育者：「でも、これはどうやって遊ばばいいのかな？」

省察促し

F男：「坂があればいいよ。」

保育者：「そうだよね。転がすには坂があるよね。でも、坂…ないねえ。どうする？」

子ども達がしばらく考えた後

工夫

F男：「分かった！いいこと考えた！ちょっと持ってきて。」

気づき

そういうと、皆をステージまで連れて行った。

F男：「ほら、こうしたら坂道ができるよ。」

F男は牛乳パックをステージに斜めになるように立てかけた。すると、周りにいた子ども達も納得したようだった。

賛同

皆：「いいねえ！」

F男の考えに、皆、賛成した。転がすものはペットボトルのキャップ。牛乳パックを繋げながら、B男が用意しておいてくれたものである。早速キャップを転がしてみると、牛乳パックの坂道をコロコロと転がっていった。皆で代わる代わるキャップを転がして遊ぶ姿が見られた。



### 【考察】

・牛乳パックを使って、『ビー玉転がしを作りたい』という共通の目的のもと、牛乳パックを加工して樋のようにして繋げていった。

- ・保育者を頼らず、自発的にビー玉転がしを作ろうと動く姿が見られ、戸外や室内で雨どい遊びを繰り返してきたことで、転がし遊びが子ども達の遊びとして定着していった。
- ・子ども達は目的を達成する為に頑張って他のクラスを回り牛乳パックを集めた。
- ・坂を作る為にどうしたらよいか皆で考え、問題を解決していた。

〈保育者の援助〉

- ・牛乳パックがなくなった時、保育者は牛乳パックを自分たちで遊ぶ道具を集める経験をしてほしいという願いから省察促しの言葉をかけた。また子ども達が牛乳パックを長く繋げて満足している時に「どうやって遊べば良いかな？」と省察促しの言葉をかけ、問題を明確化して、坂を見つけてより遊びが面白くなるようにしていった。

～角度を調節する～

牛乳パックを繋げる遊びが続く。H子は母親に頼み、家庭からもたくさん牛乳パックを持って来てくれた。前日同様、女兒達がH子の牛乳パック繋げ、どんどん長くなる。坂道を作るにはステージだけでは足りなくなってきた。子ども達は牛乳パックを繋ぎ終わると、早速キャップを転がそうとするが、前日のようにキャップはスムーズに転がらず、途中で止まってしまった。子ども達は牛乳パックを触って確かめ始めた。

I子 : 「ここを高くすればいいんじゃない？」

目的の共有

H子 : 「この場所で止まっちゃうよ。ここ持った方がいいよ。」

試行錯誤

問題を解決するための話し合い

I子 : 「ガムテープにくっついて転がらないんじゃない？」

A男 : 「もう一回しっかり貼った方がいいんじゃない？」

接着したガムテープが浮いてきてしまっている所を探しもう一度しっかりと止め直したり、高さ、角度など調節しながら試す子ども達。キャップが転がらない理由を一生懸命に考えながら、自分の考えを口にしたり、友達の考えに耳を傾け一緒に試してみる姿が見られた。次第に牛乳パックの下に潜り込み、手で支える、頭で支える、体で支える…と、丁度良い角度を探しながら自分達が体の一部を使って支えることが楽しくなってきた。

自分の体を利用する

問題を解決する

R子 : 「見て見て！」

と、面白い支え方を考えおどけて見せるR子に、“何だか面白そう”と、子ども達は惹かれて、真似していく。

最終的に、「誰かが押さえて持っていればいい。」という考えで落ち着き、

アイディアの共有

R子 : 「はい、先生もここ持って！」

と、保育者も駆り出され、皆で牛乳パックのレーンの下に潜り込んで支えるという遊びを楽しんでいた。

R子 : 「はい、いいよ！」

M子 : 「行くよ～！」

目的の共有

話し合い

H子 : 「先生、もう少しそこ上に上げて！」

I子 : 「A男くん、もう少し下！」

没頭する

B男 : 「やった～！」



子ども達はお互いに角度を調節しながら、力を合わせて遊ぶことを楽しんでいた。



### 【考察】

- ・どうしてキャップは転がらなくなってしまったのか？よく考え合って、触ったり揺すってみたり、転がるキャップを観察したりといった姿が見られた。
- ・子ども達の“キャップが転がらなくなってしまった困り感”から、『なんでだろう？』『知りたい』と、主体的に疑問に感じ向き合っていた。
- ・見て触ることで調べたり、自分の考えを「もしかしたら～じゃないかな？」と伝え合い、考えたことを試してみながら対象物を知り、疑問を解決していく探求心の育ちを感じた。
- ・キャップが転がる様子を観察し、剥がれかけたガムテープで止まってしまうということに気付き、全てのガムテープを触り、剥がれていないか確かめ、剥がれている箇所はもう一度しっかりと貼り直していた。
- ・H子の「持った方がいいよ。」という意見から、手で持って角度を付け始め、次第に牛乳パックの下に潜り込むなど、自分の体を使って様々な支え方を楽しむようになった。その場の楽しい雰囲気子ども達の心を一つにし、皆で力を合わせることの喜びへと繋がっていったようであった。
- ・いつもは恥ずかしがり屋なI子、M子も、楽しい雰囲気にリラックスし、自分の考えを伝えたり、大勢の中でも活き活きと動く姿が見られた。

### 〈保育者の援助〉

- ・保育者は見守りながら、子ども達が気づいたことを利用してどう考えて問題を解決していくか見取っている。

<事例⑥複雑になる坂道> 1月

E男 :「先生、ちょっとこっちに来て！」

E男が見せてくれたのは、ホール遊び用に11月頃設定された雨どいであった。設定されてから3か月、E男の目に留まることがなかった雨どいだが、それを自分で見つけ出した喜びは、まるで宝物を見つけたかのように大きな喜びであったようだ。

E男は早速雨どいと雨どいを連結させて遊び始めた。そこにC男とP子が「い〜れ〜て！」と、やって来た。E男は雨どいを見つけた喜びを保育者に伝えたことから、保育者と一緒に遊びたいという気持ちが感じられた為（E男の性格からも）、保育者は直接的に関わり一緒に仲間になって転がす装置を作っていく。完成させると、一緒に設定されていたピンポン玉を転がして遊んだ。ピンポン玉は今までの折り紙の玉よりも、ペットボトルのキャップよりもよく転がり、子ども達は夢中になって転がして遊んだ。

ピンポン玉転がしが再び人気の遊びとなり、A男、B男、C男、D男、E男、F男、H子、I子、K男、Q子、R子、S子が遊びに参加するようになった。

E男の遊びを見ていたF男とK男。事例⑤で使った牛乳パックの坂道を思い出し、「続きがしたい！」と言う。もう使わないかな？と迷いながら残しておいた牛乳パックの道を再び保育室にもって来ると、二人で牛乳パックを切り開き、更に長く繋げ始めた。

一方、ホールでは、ゲームボックスも使い、先日よりもより高く、ダイナミックにゲームボックスとソフト積み木を組み合わせて遊ぶ。雨どいを組み合わせて行く中で、連結の為に用いる新しい部品と出会う。

E男 :「ほら、見て！落とし穴！」

落とし穴から落ちた玉が転がるように絶妙なバランスでまた、雨どいの坂道を作っていく。どんどん作るE男に対し、慎重なB男やD男はじっくりと考えながらE男が作った道のバランスを直していく。

目的の共有

役割分担

S子 :「ほら見て、トンネル！」

S子が自分の縄跳びでトンネルを作ると、H子、I子も真似をして遊ぶ。

友達のイメージ  
を取り入れる

雨どいの重なり方が反対で転がした玉が止まってしまった。

B男 :「こうすればいいよ。」

仕組みの理解

と言って雨どいの重なりを直した。



・様々な形で転がす遊びを遊び込んできた子ども達は、雨どいの坂道も容易く作れるようになった。又、落とし穴に出来る部品を見つけたことで、落とし穴や縄跳びで作ったトンネルなど仕掛けづく

りに夢中になったり、転がす玉も、ピンポン玉、ボールなど様々な道具で試し、転がり方の違いを発見し驚く様子も見られた。コマ回しが得意なC男は回したコマを雨どいの坂道にのせて滑らせることを繰り返し楽しんだ。

**【考察】**

・坂道を作るだけでは満足出来ず、より面白くなる為に試したり工夫したりする力の育ちが感じられた。

**<保育者の援助>**

・保育者は見守りながら、子ども達が気づいたことを利用してどう考えて問題を解決していくか見取っている。